

14 宮崎県立看護大学 看護学部 看護学科

看護の基本理念にもとづく自己省察型グループワークで深い洞察と気づきを与える

看護の理論・技術を学ぶだけでなく、「患者の立場に立ち考え、実践する」という看護師としての基本的な心構えを、実習と省察の繰り返しの中で学んでいく。本学部のすべての教育が内発的な気づきと反省を促す教育となっており、患者の位置から自分の看護活動を評価することを重視している。

理念や思想重視の教育でありつつも、グループワークの手法と統一的な評価基準を用いて体系的かつ組織的に看護能力の育成が具現化されている点も特徴と言える。

【学科の特長・基本情報】

宮崎県の地域医療を支える看護系大学、看護師課程のほか、助産師・保健師の育成も行っている。国が定めた指定規則に準じてカリキュラムを設計している。

学科学生数	100名	学科専任教員数	50名
-------	------	---------	-----

指定規則にもとづいたカリキュラム改訂

本学部の教育では、専門職者育成を目指した看護学教育カリキュラム編成を基盤に、国家試験受験資格取得（看護師、保健師、助産師）が目的となっている。そのため、文部科学省・厚生労働省所管の保健師助産師看護師学校養成所指定規則を受けてカリキュラムが編成される特徴がある。したがって、カリキュラム設計の自由度は他の学部系統よりも小さい。人間のライフサイクル全体を対象とした看護活動を教育するプログラムを実践しているところに特徴がある。

平成20年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正を受け、本学部でも平成21年度にカリキュラム改訂を実施した。カリキュラム改訂では看護実践力の強化と卒業時の到達目標の明確化が行われ、より看護現場での臨床実践を強化するカリキュラムにシフトした。また、平成23年の改正では、看護師・保健師統合カリキュラムから保健師課程選択制へと移行している。

体験重視の教育により実践力を強化

具体的には、1年次のフィールド体験実習Ⅰ

において、老人福祉施設・障がい者施設などの生活介護施設で利用者とのかかわりを体験し、自分がこの施設利用者の生命にどのように関与できるのかを考え、看護師としての自覚や責任を感じてもらった教育を実践している。さらに、2年次の「フィールド体験実習Ⅱ」では、高齢者施設に出向き、人間の誕生から死亡までのライフサイクルを理解するとともに、家族を対象とした看護のあり方を学んで、看護師としての意識をさらに高めてもらうようしている。

1～2年次の体験・統合科目はびっくり体験の場であり、「一体自分はどこに心を動かされたのか」、自分の中での看護活動における気づきを得ることを目的として実践している。

さらに、2年次後期の「臨地実習Ⅰ」は患者の看護計画を作成し看護体験をする実習であるが、どのような看護実践をし、患者からどのような反応が返ってきたのかを振り返り、評価基準をもとにした自己評価を行う。自分が患者の「何を見てどう対処したのか、本来は何をなすべきであったのか」、一つひとつ丁寧に振り返る実習である。

そして3年次の「臨地実習Ⅱ」4年次の「臨地実習Ⅲ」では看護師の専門性と総合力を修得していく。

開学当初の理念にもとづく省察型教育

これらの体験実習後には必ずグループでの省察の時間を設けている。グループごとにそれぞれの学生が実習の中で体験したこと（患者への関わり方、患者からの反応など）を一つひとつ丁寧に記述し、指導教員とともにKJ法を用いて異なる体験の中から共通している課題・個別の課題を構造化して整理する。そして、「自分の看護行為は患者にとってどのような意味があったのか、何をなすべきであったのか」を学生自ら考える教育を行っている。

これらの実習と精緻な省察を繰り返すことにより、なぜこの看護行為が必要なかを自身で感じ、分析することにより、看護師の総合的な実践力を育成している。

その根底にあるのが、「生命の尊厳を基盤とした豊かな人間性を育成し、看護の果たすべき役割を追究し、人々の健康と福祉の向上に貢献できる人材を育成する」という開学当初からの教育理念であり、その理念を実習や普段の授業の中で、体験、気づき、省察という繰り返しによ

り実践している。グループワークの手法を用い4年間を通じて「他者にとっての自己の関わりの意味」を相手の位置から自己評価する能力を高めていくことが本学部のねらいである。

指導教員の教育力向上のための指導過程リフレクション

省察を行うグループワークでは必ず各グループに助教などの指導教員がついている。各指導教員の指導力向上（FD）のために、毎年教員向けの指導過程リフレクションを実施している。年2回、指導教員のグループワークでの指導方法に関して各教員に自己評価をしてもらいながら、指導方法の向上を図っている。FDにおける省察・自己評価の評価基準も設定しており、学生の討議や発表の促し方、学生の体験の構造化などの各プロセスについて評価基準にもとづいた省察が行われている。

学生だけでなく指導教員も省察を実践することで、「相手を理解し相手の立場に立ち考え、看護を実践する」という看護の理念の浸透を図っている。

本学科の体験・統合科目

1年		2年		3年		4年	
1セメスター	3セメスター	4セメスター	6セメスター	7セメスター	7・8セメスター	卒業研究	
フィールド体験実習Ⅰ	フィールド体験実習Ⅱ	臨地実習Ⅰ	臨地実習Ⅱ	臨地実習Ⅲ			
乳幼児・高齢者や心身に障害をもって生活している人々との関わりを体験し、他者への関心と理解を深めます。	高齢者が生活している多様な生活の場に向かう実習を通して、高齢者の思いや生活の様子を把握し、高齢者理解を深めるとともに生活の場の特性と必要な支援を考えます。	一人の患者を受け持ち、観察した事実をもとに全体像を描き、対象特性を把握して看護の方向性を定め、個別的な反応に沿って看護を実践します。	地域社会で生活する家族を対象として、どのような健康レベルにあっても、どのような場にあっても、その状況を的確に判断し、看護を実践するための基礎的な知識、技術、態度を習得することを目的とします。	学生が主体的に選択した特定の領域においてチームアプローチを含めて看護の総合的な能力を高め、自己の看護観の発展をめざす自立実習です。大学からの実習指導者は随時相談・調整には対応しますが実習場にはおりません。自己が選択したチームおよび対象群の特質を把握し、独力で参加します。チームの一員として自己の持てる力を発揮しながら、対象群への看護を実施し評価します。展開した看護現象から、臨地実習Ⅰから臨地実習Ⅲに至る自己の看護観の発展の軌跡をまとめます。	4・5セメスターで取り組んだ「看護研究」で学んだことを前提に、学生個々が研究テーマの決定、研究計画、研究への取り組み、論文作成、発表までの過程をたどります。その体験を通して自らの疑問を解明していくことの意味やおもしろさを経験すること。さらに、学生が将来にわたって看護研究に関心を深めることができるように研究的態度を身につけることが目的です。		
実習のフィールド	実習のフィールド	実習のフィールド	実習のフィールド	実習のフィールド	実習のフィールド		
県内の老人福祉関係施設、障がい者（児）福祉関係施設、児童福祉関係施設等	県内の老人福祉関係施設	県立宮崎病院ほか	県立宮崎病院ほか県内の医療機関、保健所、市町、訪問看護ステーション等	県立宮崎病院ほか県内の医療機関、保健所、市町、訪問看護ステーション等	（自主的に選択した）医療機関、市町村、訪問看護ステーション等		

出典：「キャンパスガイド2013」より一部抜粋